



## 「北仲COOP」と「創造界隈」の形成

北仲通地区の仮施設で、ヨコハマ・トリエンナーレ2017にあわせ、creative Shop & Gallery 北仲COOPが誕生する。2004年(平成16年)横浜市が「クリエイティブシティ政策」発表して以来、関係してきたアーティスト・クリエイターたちが、この北仲COOPに集まりミュージアムショップを開設する。会場には、かつて帝蚕倉庫事務所棟に置かれていた、森ビル株式会社制作の横浜都心部の模型が展示されている。そして会場壁面はレンガ造を思わせるデザインと、北仲BRICKの看板が設置されている。なぜ、この北仲通地区で、今回の北仲COOPは開催されるのかその意義を探ってみたい。

北仲通地区は、「横浜」の名前の由来でもある、大岡川の河口に入江をつくって横に長く伸びる砂州の先端部分にあたる。この地は、横浜村の鎮守社である弁天社の社領地であった。幕末期の開港後には、フランス公使館、ドイツ領事館、オランダ領事館がおかれるとともに、日本の灯明台役所(後に灯台寮、灯台局と改称)が置かれた。明治7年には、国産波止場が設けられ、東西の両波止場に次ぐ重要な地区となっていく。そのため、灯台寮に作られた試験灯台や横浜毎日新聞の創刊など、日本の事始めも数多く生まれている。

関東大震災後は、本町にあった生糸検査所が当地に再建され、あわせて帝国蚕糸倉庫が建設された。また、灯台寮の後身である海上保安本部も設置されている。

そのような、横浜の歴史にとって極めて重要な地に、2000年(平成12年)、北仲再開発協議会が発足し、新たなまちづくりがはじまった。当時この地区には、横浜第2合同庁舎、帝蚕倉庫事務所棟と3棟の倉庫のほか、帝蚕ビルディング、万国橋ビル、石積護岸等の歴史的建造物が残されていた。

2001年というほとんど同じ時期に、第1回横浜トリエンナーレが開催され、2004年(平成16年)に、横浜市は「文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会(故・北沢猛委員長)」の提言に基づき「クリエイティブシティ政策」を打ち出した。同年、3月にBankART1929が、北仲通地区と隣接する馬車道の旧富士銀行横浜支店(現・東京藝術大学大学院映像研究科)と、横浜銀行本店

別館(現・ヨコハマ創造都市センター)において誕生し、4月に文化芸術都市創造事業本部が生まれた。この提言の中には、「アーティスト・クリエイターが住みたくなる創造環境の実現」がうたわれており、5000人のアーティスト・クリエイターの集積が目標となっている。最初の横浜の創造都市政策の中心的事業が、創造界隈拠点の整備であり、BankART1929事業であった。

BankARTのカフェではアーティスト・クリエイターたちが情報交換し、スタジオでは2か月間程度、様々なアーティストが集まって作品を制作し、スクールでは芸術文化を学ぶ場となっている。またBankARTの企画する展示会も開催される。BankARTという拠点を中心に集まりだしたアーティスト・クリエイターたちが横浜に滞在・居住することを、行政ではなくNPOと民間側から仕掛けたのが、「北仲BRICK & 北仲WHITE」と言うことができる。横浜で5000人のアーティスト・クリエイターを集積するためには、アーティスト・クリエイターが不動産賃貸としてオフィス床を借りることが前提となる。若いアーティスト・クリエイターにとって個人でスペースを借りるのはハードルが高いが、再開発予定地の古いビルを暫定的に、個人ではなく集まって大きな床を借りることで不動産床が借りやすくなるという仕組みだ。

当時、帝蚕倉庫事務所棟(BRICK)と、帝蚕ビルディング(WHITE)は、北仲地区で再開発事業を進めようとしていた森ビル株式会社が所有していた。横浜市のクリエイティブシティ政策にも合致している。建物所有者の森ビルとしては、都市空間の空白がクリエイティブな場へと変化することは大きな効果であり、再開発事業への期待感を醸成する効果も期待できる。現代アートにも理解を示す森ビルならではの英断であった。そして、森ビル株式会社と、NPO BankART1929が共同して取り組んだプロジェクトとして、2005年(平成17年)6月、約50組のアーティストや建築家などのクリエイターが入居する「北仲BRICK & 北仲WHITE」がオープンした。なお、この時、森ビルが都市に関する様々な展示とイベントを開催し、新しい横浜の未来を地元の人や関係者と考えるラボを、北仲BRICK1階に開設した。横浜ポートサイド地区から山下ふ頭地区の1/1000の都市模型が制作展示された。これが

現在北仲COOPに置かれている都市模型である。

この2005年(平成17年)は、都市と芸術の関係性に大きな影響をあたえた横浜トリエンナーレ2005(ディレクター:川俣正)が、9月から開催されている。歴史的建造物や倉庫、都市空間の中で現代アートが躍動した年でもある。街に開かれたトリエンナーレが実践され、都市の中の未利用な空間がアートにより開かれていく価値が認識された年とも言える。

これらを機会に、横浜市芸術文化振興財団が、アーティスト等に対する相談窓口として「アーツコミッション・ヨコハマ(ACY)」を設置し、2005年度(平成17年度)9月より、「アーティスト・クリエイター等立地促進助成」を開始した。民間事業の支援として、横浜市も政策として取り組み始めたのである。

この事業は、単に横浜にオフィスを構えるアーティスト・クリエイターが増えただけでなく、彼らが集まって仕事を始めたことにより、お互いに刺激しあい創造活動の幅が広がり、自然にアーティスト・イン・レジデンスのような効果をあげていた。また、分野が異なるクリエイターたちがチームとして仕事を受けることも増えつつあり、様々な意味で周辺の街へ良い影響力を発揮し始めている。

これにより、横浜の創造都市政策は、BankARTや、急な坂スタジオ、初黄・日ノ出町地区、ヨコハマ創造都市センターなどの公共側が用意した場をNPOなどが運営する公設民営型の創造界隈拠点と、アーティスト・クリエイターたちが集合体として活動を始めた万国橋SOKOや、北仲WHITEなどの民間施設を民々契約でアーティスト等が活用する民設民営型の拠点の両輪を軸として、「クリエイティブシティの界隈」が形成され動き始めていく。

これらの動きは、北仲BRICK & 北仲WHITEが、2006年(平成18年)10月に閉鎖された後も、本町ビル45(シゴカイ)や、ZAIMに引き継がれるとともに、宇徳ビルヨンカイ、八〇〇中心、新港埠頭の新・港区や、さくらワークスなど、関内外に数多くのアーティスト・クリエイターたちが集まってオフィスを借りる拠点を形成することにつながる。彼らは施設ごとに運営ボードを組織し自治運営をしている。そして、現在、「関内外OPEN!」というネットワークとなり、

自分たちの事務所のオープンや、街なかでのイベントなど、クリエイティブな新しい活動につながっている。このような動きは、他都市では見られない創造都市・横浜独自の展開と言える。

このように、北仲BRICK & 北仲WHITEは、横浜の地に、アーティスト・クリエイターたちが、初めて集合してオフィスを構えた、聖地的な存在と言え、後々連鎖的に関内外を中心にこのような施設が展開するきっかけとなった事業である。

2005年以来、横浜から、東京オリンピックのエンブレムをデザインした野老朝雄さんをはじめ多くの人材が育っていった。そして、新たな若いアーティスト・クリエイターたちが、横浜で活動を始めようとしている。クリエイティブシティの聖地ともいえるこの地、北仲地区に誕生するShop & Galleryとして、数千点のアートグッズが集まるだけでも、更に新しいことが生まれそうな予感でわくわくする。主人公は、アーティスト・クリエイターだけではない。さあ、気に入った彼らの作品を買うことを通じて彼らを応援し、横浜のクリエイティブシティに参画しよう。

北仲の地が、これからも横浜の創造都市の将来を切り開く場所となっていくことを期待して!

横浜市 温暖化対策統括本部 環境未来都市推進担当部長  
(元・文化観光局 創造都市推進部長)

秋元康幸